

二人の天才に思う

島崎弘幸

令和3年(2012)12月24日



天才の活躍

2021年を振り返ってみると、若き二人の天才が、私たちに感動を与えてくれました。アメリカ大リーグの大谷翔平選手と、将棋界の鬼才、藤井聡太9段（四冠）です（以下敬称略）。

改めて述べるまでもなく、大谷は投打二刀流で日米の野球ファンを魅了しました。私も大谷の活躍を見るのは楽しみでした。帰宅して、今日はホームランが出たかな？…とスポーツニュースを見れば、期待通りにホームランを打っているのですから、応援のしがいがありました。時差によっては、朝の7時のNHKニュースで、大谷のホームランを知ることもありました。あと、さわやかな笑顔が良かったですね。あれだけの成績を残すためには、並外れた努力があつてのことですが、それを顔に出さないところがすごい。最も努力だけでは、生まれ持ったものがなければ、達成できるレベル(成績)ではないと思いますが…。

藤井はデビューから29連勝して世間を驚かせました。本年(7月)には、18才11か月(史上最年少)で、将棋界の最高段位9段に昇進しています。その2か月後、9月には、19才1か月で叡王戦に勝って史上最年少の三冠(王位・棋聖・叡王)に着き、更に11月には竜王戦7番勝負に4連勝して、史上最年少の四冠を達成しています。AIを駆使して、実力を伸ばしているとのことですが、竜王戦の対局で、藤井はAIの手にはない指し方をして、AIを超えているとの報道も目にしました。将棋の実力ゼロの私ですが、今日は勝ったか、明日はどうかと応援していました。二人とも、来年も大活躍をすることでしょう。

真鍋さんのノーベル賞

今年のノーベル物理学賞は、真鍋先生ら3人の方でした。日本人の受賞者として、真鍋先生は28人目(外国籍を含む)だそうですね。天才は生まれ持った才能ですから、真鍋さんが50才を過ぎて、急に天才になったわけではなく、子供の時から天才であったと思いま

す。その片鱗が受賞の記者会見で見られたように思います。

「私は周りとは協調して生きることができない。それが日本に帰りたくない理由の一つです」と述べて、会場は大きな笑いが起きた・・・と報道されていました。きっと、子供のころから、非凡なものを見方をする、周りとは妥協をしない子供だったのでしょうか。

「研究を始めたころは、こんな大きな結果を生むとは想像していなかった。好奇心が原動力になった。後に大きな影響を与える大発見は、研究を始めた時にはその貢献の重要さに誰も気付かないものだと思う」(NHK WEB)

「最近の日本の研究は、以前に比べて好奇心を持って研究することが少なくなっているように思います。日本では、科学者が政策を決める人に助言する方法、つまり、両者の間のチャンネルが互いに通じ合っていないと思います。米国はもっとうまくいっていると思う」(NHK WEB)

とも報道されています。

日本の科学行政

今年(2021年)12月の初め、政府の経済財政諮問会議(議長・岸田首相)で、成長戦略の一環として10兆円規模の大学ファンドを設け、メリハリをつけた大学支援をおこなうように提言をしたと報道されていました。支援は「特定研究大学」を新たに指定して、10兆円の運用益を配分する。支援の対象は「大学経営、研究の質を考慮し、徹底したメリハリで配分する」「世界トップクラスの研究力を持つ大学の育成を目指す計画」とのことでした。新聞を読んで、分かってないなア…という気持ちです。

2005年頃でしょうか(正確ではありませんが)、文科省は研究費を減らす目的で、成果主義と言い始めました。有能な人材に重点的に配分するという建前の下、当たれば大きな研究費が得られる一方、大学院大学でもない限り、一般大学の研究者には、研究費の配分が削減されました。その結果、何が起こったのか。研究費の奪い合いが始まったわけです。毎年、たくさんの論文を出さなければ、次の研究費がもらえないことになりました。研究者として最もしてはいけないデータの改ざんや、捏造が行われるようになったのも、研究費の獲得競争があるからではないでしょうか？

真鍋さんの指摘する「好奇心による研究」ではなく、予算獲得のための業績創りです。アメリカの制度(NIH Grantなど)をまねていると思いますが、アメリカとの違いは、日本では行政が、科学研究費の削減をするために、競争の制度を導入したことです。「2位じゃダメなのでしょうか？」も、この時代の象徴です。

富士のすそ野

大型の研究費を求めて競う優秀な人たちがいる一方、他方では、学会発表もままならない研究者も増えました。後者の結果が学会活動の衰退であり、会員の減少です。バブル崩壊による企業の研究活動の減少（人員削減）や、文科省による講座制の廃止、研究費の削減（有能な人のみの重点配分）の結果です。

真鍋さんが、アメリカに渡って業績を上げたことも、大谷がMLBに行ったのも、藤井が日本に留まっているのも、みんなそこに競える相手がいるからです。萌芽的研究の段階にあった真鍋さんの研究を認めたのは、真鍋さんの研究を理解できる研究者がアメリカにいたからです。周りのレベルが低ければ、天才と言えども十分な力を発揮することはできません。個々の研究者にとって、学会は、お互いの研究を認めたり、批判するために絶対に必要な組織です。

行政は、富士山の頂上のみにお金をつぎ込むのではなく、学会を支える大勢の一般研究者にも、研究費を配分すべきです。富士のすそ野がなければ、富士は高い山にはならないのですから。また、好奇心にあふれた少年、少女にも、行政は目を注ぎ、科学の世界の大谷や藤井を育ててもらいたいものです。

エピローグ

こういう私も、科学の世界に好奇心を持つ少年でした。が、それだけでした。そんな男も、油脂の学会のすそ野で50年、なんやかやで2022年を迎えることが出来ました。(感謝)

[Home](#)[「ホームページ」表紙へ戻る](#)[Back](#)[「島崎弘幸」へ戻る](#)